

仙台育英学園 同窓会々報

全国屈指の私学の雄

仙台育英学園同窓会

会長 小坂 信雄



酷暑の時事、同窓諸兄
姉各位におかれては壮健

で社会の各分野で活躍
のことも存じます。
同窓会も、母校九十六
年の歩みと共に同窓生の
皆さんに支えられ、学園
の加藤昭学園長、加藤雄
彦校長の両先生はじめ教
職員の方々の指導により
円滑な運営と事業の推
進を行っていることは

感謝に堪えません。
母校のすばらしい発展
については皆さんも承
知のことと存じますが、
学業において有名大学等
進学では他校に抜きんで
た成績を發揮し、また就
職活動でもこの不況の中
100%に近い高率をもつ
卒業生を輩出いたしてお

ります。
スポーツの分野では、
今年も宮城県高等学校総
合体育大会において各種
目に活躍し、代表として
熊本で開催の全国大会に
出場いたしており好成績
が期待されております。
今春の全国選抜高等学
校野球大会に於いては、
母校硬式野球部が日頃の
実力が認められて晴れて
出場得たことを甲子園
球場でこれまで培った技
を十分に駆使して縦横無
尽に活躍しました。互角
に戦った決勝で惜敗に終
わったが、浅野県知事に
「暗い」ニュースの多いと

き、明るくすばらしいニ
スをもたらし」と賛辞
を頂くとともに、健闘によ
り優勝に輝いたことは、
全国各地で声援を送り続
けた同窓生に多大の感銘
を与えてくれたことと存
じます。
今年、新世紀になっ
て初めての国民体育大会
が地元この宮城県を会
場として開催されますが、
育英健児は先輩から受け
継いだ、練習を続けてき
た技と、育英魂を發揮し
てすばらしい成績を得る
ものと同窓の皆さんと共
に大きな期待を持って声
援を送りたいと思ひます。

さて、わが母校仙台育
英学園も創立者加藤昭吉
先生が、「至誠・質実剛
健・自治進取」の建学の
精神を基として学園を創
設されて今年で九十六周
年を迎え、四年後には百
周年の目出度い記念すべ
き年を迎えることになり
ました。
この栄えある百周年に
あたりあらためてこの百
年を振り返り創立者加藤
昭吉先生の遺徳を偲び、
併せて戦災復興、校地移
転、校舎建設と拡張、教
育環境の整備充実など筆
舌に尽くし難い苦難の道
程を共に歩まれて今日の繁
栄の礎を築き上げられた
理事長加藤昭吉先生、そ
して教育の充実、教育施設
設備の整備など教育効果
の向上、中学校の再興設
置に努力を重ねられた今や
全国屈指の私学の雄とし
て教職員、先頭に立たれ
て活躍されている中学、

- (1) 百周年記念館の建
 - (2) 創立百年史の刊行
 - (3) 記念式典の挙行
 - (4) その他百周年に相
応しい事業
- 同窓会としても「記念

「四十五年ぶりの再会」 昭和三十年卒七組同級会

山崎 隆 代(昭30年卒)

四十五年ぶりに懐かし
顔が集い「心は高校三
年生」になって新世紀の
一夜をフィーバーした。
昭和三十年卒三年七
組同級会が、一月二十
日秋保温泉「蘭亭」で開
かれた。会には北海道、
兵庫などから二十四人が

参加した。
なにしてる半世紀近い年
月が過ぎ、大半が卒業以
来初めて顔を合わせる仲
間とあって、お互いにネー
ムプレートを見ながら、
かつての面影を思い出す
のにひと苦労だ。あ
ま、宮城君が、あ
さっし、今回の同級会
開催までのいきさつな
どを説明した。次いで
亡くなった恩師・安部
朔先生(学級担任)と
クラスメート四人の冥
福を祈り黙とうを捧げ
た。そのあと兵庫県加
古川市から駆け付けた
早坂君の乾杯の音頭で
祝宴に移った。その後
千葉君から生徒数五千
人を越し、設備も充実
し、大学進学に、スポ
ーツに全国に誇る名門校
となつたのが育英学
園の現状を説明した。
昭和三十年当時生徒
が千人前後、校舎も木
造だっただけに母校の
躍進ぶりに一同驚くば

り。
自己紹介が進む頃には
宴もたけなわとなり、タ
イムマシーンに乗って、
紅顔の美少年たちは大い
にハッスル、話もはずん
だ。予定の二時間はあっ
という間にすぎ時間延長
という間にすぎ時間延長
という間にすぎ時間延長
という間にすぎ時間延長

仙台育英学園秀光中学校校長
仙台育英学園高等学校校長

加藤 雄彦

社中協力をお願い

ターゲットしました。

体育会ラグビー部の花
園における大活躍。全国
高校ラグビー選手権大会
初のベスト四(県勢とし
ても初めての快挙)、ま
た第七十三回センバツ高
校野球大会での準優勝は、
同窓生のみならずにも記
憶に新しいことと思ひま
す。甲子園では新二年生
による全員応援(人文字
による青地に黄色で育英
のIのイニシャルを表現
した)は、硬式野球部員
の笑顔の「伸び伸び野球」
と試合後の球場内外の清

とともに、夢と感動を東
北地方の多くの人々と分
かち合う喜びとなったの
です。

優勝決定戦終了後興奮
さめやらん中、球場の貴
賓室で牧野隆日本高野連
会長、齊藤明日新聞社
社長諸氏など主催者のみ
なさまから本学園硬式野
球部員たちに送られた祝
賛と激励の言葉は私の耳
から離れません。同時に
に、阪神電鉄社長からは
仙台育英生の応援マナー
と試合後の球場内外の清

掃奉仕活動を認めて頂き
是非仙台育英学園には再
びこの甲子園球場に県代
表として来て貰いたい
の親しみを感じる評価を
頂くことができました。
応援に訪れた生徒たちは
もちろんのこと、彼らは
熱心に指導されてこれ
た教育熱心な先生方にこ
の紙面をお借りして改め
てお礼を申し上げます。

本学園の先生方の仙台
育英生に対する教育指導
は、あらゆる場面で発揮
されています。平成十二
年度卒業生(本年三月卒
業)の大学進学率が就職
実績でもそのことが就職
とつながります。七二
七名の現役実合格者数は
四年前から掲げていた七
〇〇名現役進学達成とい
う目標を学園内の各コー

スの先生方が共通の認識
をもって横断的に力を合
わせた結果です。合
表として来て貰いたい
の親しみを感じる評価を
頂くことができました。
応援に訪れた生徒たちは
もちろんのこと、彼らは
熱心に指導されてこれ
た教育熱心な先生方にこ
の紙面をお借りして改め
てお礼を申し上げます。

には多数の同窓生のみ
なさまが講師として後輩
たちに対し、献身的に助言
奉仕して下さいました。
現在の厳しい経済情勢の
中、各企業において寸暇
を惜しんで仕事されている
にもかわからず、母校
の就職希望の後輩たちに
兄貴のように世話してい
る姿には、思わず手を合
わせたいと思ひます。

世間は「改革」ブーム
で、何をやるにしても、
この言葉が付きまとい傾
向がありますが、仙台育
英学園には「改革」に代
わる概念があります。そ
れは、「変化に対応でき
る柔軟な経営戦略」です。
これを表現するためには
「ネットワーク」、「フッ
トワーク」、「チームワー
ク」の三つの重要なワー
クが必要不可欠だと思ひ

ます。常に、感度の高い
情報収集能力を確保し、
状況に応じた適切で即効
力のある行動力を維持し、
そして組織としての成果
をあげるためにそれぞれ
の分野でそれぞれの力量
を發揮するスタッフをま
とめ、調整していく能力
を高めていこうとする発
想です。これが今後とも
継続的に実行されていく
生徒の間には目には見え
ないけれども、強力な作
用、すなわち社中協力的
体制が確立し、仙台育英学
園の私学としての地位が
拡大していくものと確信
しています。何卒、仙台
育英学園の発信する情報
に対して、発展的な
ご支援をお願いいたしま

す。
http://www.sei.ac.jp



二十一世紀最初の年、
そして仙台藩主伊達政宗
公が仙台を開府して四百
年、更に「新世紀みやぎ
国体」が地元宮城県で開
催される記念すべき一〇
〇一年、仙台育英学園は
栄光を目指して力強くス

る。

る。

る。

る。

る。

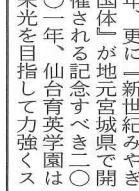
る。

る。

る。

る。

る。



る。

る。

る。

る。

る。

る。

る。

る。

る。

る。

第73回選抜高等学校野球大会

2001. 3. 25 ~ 4. 4

準優勝に輝く!!



入場行進



斎藤明大会会長から準優勝旗を受ける嶋田俊次主将



開会式



春甲子園

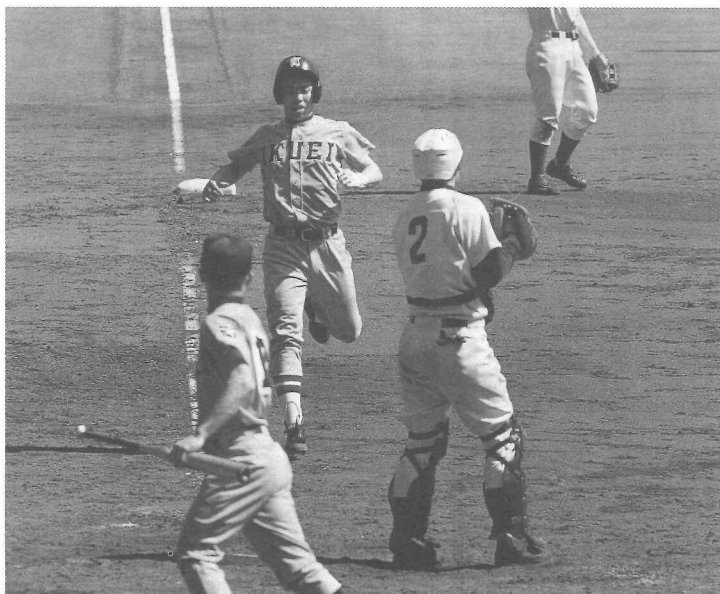
力投の芳賀投手



第11日 優勝戦 常総学院高 対 仙台育英高

4月4日午後0時31分

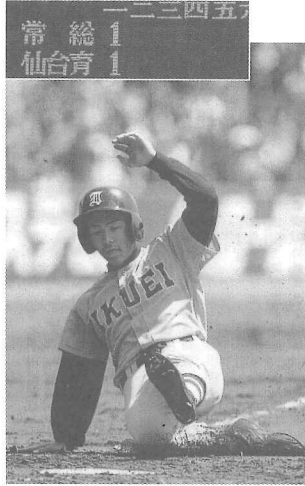
優勝戦の幕が開く



九村	八村	七村	六村	五村	四村	三村	二村	一
上田	浦田	川田	林田	田林	田林	田林	田林	田林
1	8	4	9	3	2	5	7	6
2	3	1	7	9	5	8	4	6
近藤	鷗田	佐野	村田	中野	谷	金	金	石
常総学院	仙台育英	常総学院	仙台育英	常総学院	仙台育英	常総学院	仙台育英	常総学院



四回 主砲の菊池が左翼スタンドに2号本塁打



一回 四球出塁の金澤は菊池の三塁打で同点ホームイン



外角球を読んだ菊池 一回裏に右中間に同点の三塁打



アルプス席の応援団、人文字のアイが光る



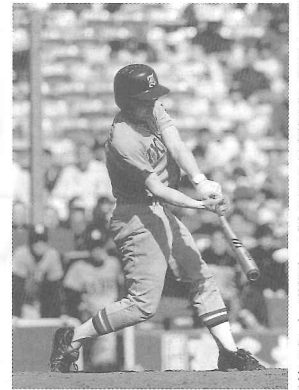
九回金澤が三塁線破る、二塁打



六回怪力の村山が右翼頭上を越す二塁打



二死二塁 村山が中前打 二塁から代走 佐藤貴が一気にホームイン 一点差に追い上げる



九回一死後 佐藤貴が中堅を襲う二塁打 一点を返す

思い起せば、昭和から平成に年号が変わった元夏、夏の準備、今度こそ、世紀が新しく二十一世紀に改まった春に再び準備と記念すべき時代の流れの交差点に当って、一段と発展を遂げつつある育英学園の姿を象徴するような慶事。戦中派と云われる昭和十七年旧制育英中卒で今年喜寿を迎えた老いの身にとっても、甲子園で健闘し勝利の栄光に眼を輝かせた歌う選手諸君の映像をテレビで眺め、四度までも一緒に声高らかになつかしい校歌を斉唱し得て、我が人生の最高の贈物を享受する幸を味わいました。率直なところ、その感動は「生きてよかった」といって、育英中に学び、これまで生かされてきてよかった」と云う実感と、果敢無（はかな）くも、戦争で若き命を国に捧げた友を始めとし、今は亡き多くの級友達へ語り継ぐ冥途の旅の土産話をいただいた充実感に満たされたものでした。顧みれば、育英中に入学生した昭和十二年の夏に日中戦争が始まり、卒業間近の昭和十六年の冬には日米戦争に突入するといふ、緊迫した日常で、一学年の二クラスだけの全校生徒が、毎朝集合して朝会が行われておりました。その壇（だん）上で折りに触れては「粘り強く頑張り通す育英魂」を創立者の加藤利吉校長先生が強調されておられましたが、今日の快挙の報

も、先生の霊に届いているものと信じております。さて、決勝戦の激動ですが、あの時は、激闘が繰り広げられた末、東西の両横綱が千秋楽結びの一番で優勝を賭けて最後の雌雄（しゆう）を決する土俵にも似た緊迫感に縛（しば）られ、固唾（かたず）を飲んでテレビの像を見つめていました。ところが試合開始直後、五球で、一点先取されたのはお走者、三塁の大ピンチ、その状況は、まるで日米開戦直後の日本海軍航空隊の真珠湾攻撃のような相手の奇襲戦法に、壊滅的打撃を蒙り、大量失点で一方的な試合展開になるのではなにかとの杞憂（きゆう）が脳裏をかすめました。あ、やっぱり、「白河の関を越して」との東北北海道北国の多数の人々の一途（いちず）な願いと期待が、すべての育英ナインの肩に、重圧となった重くのしかかっていたのだなあと痛感しました。しかし、ここからが、流石、今回の育英チームの本領発揮、すなわち、相撲（すもう）にたとえれば、立上りに、肩すかし、叩き込み、足取りの奇手で体勢を崩され、一気に押し込まれた土俵際、グッと耐えるように、最小得点に抑えて立直り、その上、「一回裏には、堂々打ち込んで同点、更に勝越しのチャンスまで作り、土俵の真中に寄り返し、ガブッリ四つに組んだ横綱相撲に盛り返したこと

に、先刻抱いた懸念は吹き飛び、正に育英ナインの底力を信じたかった我が身の軽率さを恥じました。そして、執拗（しつよう）に弱点を突いて奇襲に、奇襲戦法で攻めて来る攻撃に耐え、次第に本来の明るいう育英野球を取戻し、中盤から終盤にかけては、好守に加えて打撃大いに振り、猛追撃に転じたことはい、応援する我々をも大いに奮い立たせるものがありました。殊に、最終回、更に一点追加され、三点差に詰められて最後の攻撃を迎えた時は、普通ならば、開かれた点差に、焦りと落胆（らくたん）を（しば）んでしまうところ、美事、その重圧をはねのける先頭打者の凄まじい闘志が火を吹くような鋭い当たりとなっていたことは、正に絵に書いたような素晴らしい逆転劇のドラマチックな展開に、自分だけでなく野球好きの全国のファンを湧かせるものがあつたことを痛感しました。あわや、栄冠に手が届きそうに、グイグイ土俵際まで追いつめたところで打棄（うちす）ちられ、残念ながら、勝利の女神は相手に微笑（ほほえ）むことになりました。試合の内容から云えば、堂々、高校生らしい爽やかな攻守は、優に相手を凌いだことが誰の目にも明らかであることは、胸を張って云えることだと思えます。その証拠として、名將と云

「生きていた老いの感動」

藤崎 春雄 旧制中・昭和17年卒

われる相手監督の言葉の中でも「この試合だけは何としても勝たなかった。やりたくないこともやらざるを得なかった」という勝利に心底から満足しておられるのではなく、むしろ、一抹の空虚さを吐露されたものと受け取れました。いつも「いい顔で野球をやれること」をモットーに、毎日毎日の厳しい練習によって鍛（きた）え抜かれた爽やか育英野球の真髄は、随所に存分に発揮されたことに、新しい元氣と誇りを貰った思いで一杯であります。

それにしても、あれだけ個性豊かにエネルギーに充ち溢れている選手個人個人の特徴を引き出され、自己制御の高いレベルまで持ち上げ、その上で揺（ゆ）るぎない固いチームワークを引き上げられた監督さんの佐々木先生の達成された偉業、温かい人間性に富んだ指導力には、本当に頭の下がる思いが致します。そして、先生の下で御指導に与り、今回の尊い経験を積むことの出来た選手諸君や野球部員は勿論のこと、幸い今日の育英学園に籍を置いて学んでいる在校生のみならず、それぞれに抱いた感動と誇りは、一人一人の胸に定着し、今後の人生に、尊い支えとなることと思えます。ふり返って五十年に近い年月、教職に身を置き、昨年引退した我が若人々の一挙手一投足のスポーツを通じて得た教訓と感動は、貴重な思い出として深く胸にしま込んで、今後の生活の糧としたものであります。

